

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 西山 めぐみ

論 文 題 目

視覚的記憶の想起における記憶の生成過程

論文審査担当者

主査	名古屋大学大学院環境学研究科教授	川口 潤
副査	名古屋大学大学院環境学研究科教授	唐沢 穰
副査	名古屋大学大学院環境学研究科准教授	鈴木 敦命

論文審査の結果の要旨

本論文は、人間が持つ視覚的記憶の特徴は何かを認知心理学の実験的手法を用いて明らかにしようとした研究である。我々が通っていた高校の正門の風景を思い出したりできるのは、視覚的記憶を持っているからである。このように過去に経験した風景の詳細を思い出せるということは視覚的記憶に大量の情報が保存されていることを示唆しているが、一方で視覚的記憶は目の前で見ていく一部の情報しか保存されていないという知見もある。このような矛盾の理由については未だ明確にはなっていない。そこで、本研究では視覚的記憶の想起時に、過去の記憶を再構成しているという過程が大きな役割を果たしていることを明らかにすることで、視覚的記憶の特徴を解明しようとしたものである。

本論文は、5つの章で構成されている。第1章では視覚的記憶に関する研究を展望し、視覚的記憶の想起時に過去の記憶が潜在的に（無意識的に）想起され、その際に記憶の再構成が生じること、またその結果として記憶の変容が生じる可能性を議論した。第2章では、偶発学習事態において呈示された視覚刺激の記憶の長期持続性とその潜在的影響について明らかにした。具体的には13週前に見た顔がその後の顔の記憶想起に潜在的な影響を与えることを示した。第3章では、変化検出(change detection)課題を用いて、視覚情報の変化の検出が、過去の視覚的記憶想起の潜在的影響を受けていることを見いだした。第4章では、視覚的記憶の変容に関する現象である境界拡張(boundary extension)、すなわち事物が含まれている風景の写真を一定時間後に思い出すと、事物が小さくなるように思い出される現象をとりあげ、この現象が事前の視覚的記憶想起の潜在的影響を受けていることを見いだした。第5章では、前章までの8つの実験で明らかになった知見を元に、視覚的記憶の再構成的特徴に関する議論を行った。記憶の生成理論、すなわち過去の記憶想起は単純に保存されている記憶を取り出すということではなく、活性化している複数の記憶表象を再構成することであるという考え方によって、記憶の変容とその影響を解釈できることを議論した。

本研究は以下の点が評価できる。第一に、記憶想起がその後の認知過程に潜在的影響を与えていることを多様な課題を用いて統一的に明らかにしたこと、第二に、それらの背後に記憶の再構成過程が含まれていることを見いだした点である。審査委員からは、潜在記憶や変化検出、境界拡張といった個々の現象に関する知見は興味深くまたその解釈も妥当であるが、それらを統一的に説明する議論としての再構成過程についての説明がさらにほしいという指摘があった。それに対し、記憶の生成理論で用いられている教理モデルを援用するなどの検討が必要であるという回答がなされるなど、今後の課題として十分認識されている。これらの点をふまえて、本研究の知見は視覚的記憶の特徴解明に大きく貢献する研究として重要であることが議論された。

以上のように、本研究は視覚的記憶の想起における生成過程を実験的手法によって明らかにしたという点で心理学の発展に大きく貢献した。よって本論文の提出者西山めぐみ君は博士（心理学）の学位を授与される資格があるものと判定した。